

インプットからインパクトまで

—保健医療に重点を置いた企業市民活動

武田薬品工業(株)

コーポレート・コミュニケーション部 (CSR)

シニアマネジャー 金田晃一

タケダは、以前から日米欧の先進国を中心としてグローバル経営を進めてきたが、近年、アジア・中南米・東欧など新興国にもその範囲を広げた。ビジネスがグローバル化すれば当然 CSR もグローバル化する。ビジネスと CSR は表裏一体であり、国際社会の声をしっかり聞かないとビジネスもうまくいかない。まずは、ビジネスと同様にニーズを確認することが重要だ。

そこで当社は 2009 年に、企業が責任ある企業市民として自主的に行動することを促すための世界的枠組みである「国連グローバル・コンパクト」に参加した。続いて、国連が世界共通の問題に地球規模で取り組むため、15 年までに達成すべき目標として設定した「国連ミレニアム開発目標」(MDGs) に向けた取り組みを始めることにした。そこにはエイズ、結核、マラリアなどの撲滅や母子保健への対応、また、自社だけではなくパートナーとの共同作業など製薬会社に対する具体的な要請が明記されているため、当社では、この要請に則したプログラムを策定することにした。

タケダでは社会貢献活動を「企業市民活動」と呼び多様な活動を展開しているが、今回はその内の 2 つのプログラムを紹介したい。

タケダー Plan 保健医療アクセス・プログラム

1 つ目は、09 年からアジアで国際 NGO のプラン・ジャパン(プラン)と始めたプログラムで、年間 1000 万円の予算で 5 年間継続するものである。現在、製薬会社に強く求められている問題の 1 つ

に「保健医療アクセス」がある。一般に途上国・新興国では、保健や医療に関する知識も設備も乏しくアクセスには、価格、規制、物理的な距離などさまざまな問題がある。そこで当社が進出しているアジアの 4 カ国(インドネシア、中国、フィリピン、タイ)において、現地の保健医療ニーズに基づいたプログラムを構築することにした。

プログラム推進のためには、現地に拠点を持って活動している NGO との連携が不可欠である。調査の結果、実績を持ち信頼できるパートナーとしてプランとの連携を決めた。そこで、プランに対し予算、方向性、地域を提示し、いくつかの提案を受け協議を重ね、その中から当社の趣旨・目的に合致するものを選んで取り組みを開始した。

インドネシアの場合、貧しい地域ではトイレがないケースも少なくないが、トイレを含めた衛生管理の重要性を啓発することで、住民に自発的にトイレを建設してもらうなど、総合的な衛生改善活動を支援している。中国では、子どもたちの栄養問題に関し教師や父母の理解が十分でなく、栄養失調や子どもの発育不良が起こる場合がある。そこで、学校内での栄養の重要性についての啓発に加え、栄養価の高い食材提供の支援も行っている。フィリピンの離島では、貧困などの理由から保健医療にアクセスできない子どもたちに対して、医療サービスの提供を支援している。タイでは、HIV エイズの問題がある。そこで、思春期の子どもたちへの適切な性教育が必要となり、それを教える教師の意識改革が重要となる。

これらの活動については、場所や目的だけでな

タケダのホリスティック(包括的)・アプローチ



タケダでは、CSR 活動にあたっては、自社が単独で実施する「コーポレート・アクション型」という従来の考え方を拡張し、他のステークホルダーとともに CSR 活動を実施する「コレクティブ・アクション型」、さらには、アドボカシー、ルールメイク、イニシアティブといった、他のステークホルダーを巻き込む「プロデュース型」の活動を含むホリスティック(包括的)な視点を持ち、社会と企業の価値創造に向けた機会を最大限に活用していきたいと考えている。

- (※1) 問題解決に向けた提言活動
- (※2) ルールづくりのプロセスへの参加活動
- (※3) 率先して流れをつくる活動

く MDGs では何番目の課題に相当するかまでを最初に明確にした。モニタリングに際しては、活動が現地のニーズとずれを起こしていないかに注意を払うよう心掛けている。また単発ではなく5年間かけることで、地域住民の自発的な参加促進を期待している。現地のニーズを聞きながら、信頼できる NGO とパートナーシップを組み、高いガバナンスのもとでプログラムを推進し課題を解決していくことで、経営のグローバル化と直結した CSR 活動が実施できると考えている。

タケダ・イニシアティブ

2つ目は、アフリカで実施している「タケダ・イニシアティブ」で、10年にスタートした。こちらは年間1億円を拠出し10年間実施するもので、アフリカでエイズ、結核、マラリアの蔓延を防ぐ活動である。寄付金の拠出先は「世界エイズ・結核・マラリア対策基金」(世界基金)とした。当社はこれらの病気に対する薬を製造していないので、世界基金の仕組みを通じてタンザニア、ナイジェリア、セネガルの政府や NGO・保健省に資金を拠出し、最も効果的で透明性の高い感染症対策に活用してもらっている。

世界基金への資金提供者は基本的には世界各国の政府で、そこにビル&メリンダ・ゲイツ財団など民間財団も加わるようになった。タケダは民間

企業としては世界で2番目の参加となった。その背景には、このようなグローバル・イシューは政府だけでは解決できず、多くの民間企業が参加することが重要であるとの認識がある。「イニシアティブ」と名付けることで、他の多くの企業にも続いて欲しいとの思いを込めた。

*

企業市民活動を実践するにあたっては、資金を出すという「インプット」だけでは不十分で、「アウトプット」、つまりどんな活動をしたかを具体的・詳細に把握した上で、現地の人たちの行動がどのように変化したかの「アウトカム」までを把握することが重要だ。さらに、そのモデルを他社が活用したり別地域に横展開するなどして、より広く社会に「インパクト」を出せれば理想的だ。つまり、インプットからインパクトまでの一連の流れをプログラムの策定時にイメージできるとよい。

NGO などのパートナーと組み、長期的に取り組み、インパクトを追求し、さらに自らも実際に現場に出かけて行きその成果を確認するという4つの点を念頭に置いていること、そして、多様な手法を活用しながらも最終的な成果をあくまで「保健医療」に収斂させるということが、タケダの企業市民活動の特徴となっている。

◆武田薬品工業株の CSR への取り組み
<http://www.takeda.co.jp/csr/policy>